

宗教心理学研究会ニューズレター

第20号 2014.3.25

宗教心理学研究会

Society for the study of psychology of religion

目次

第 11 回研究発表会報告	報告 中尾将大	1
日本心理学会第 77 回大会公募シンポジウム報告		
宗教性／スピリチュアリティと精神的健康の関連(1)	報告 浦田 悠	8
「異なる座標軸」がもたらす可能性	西脇 良	12
大スズメバチの猛毒を前にして	平子泰弘	13
神道のあり方を求めて 2013		
(日本心理学会 宗教心理学研究会企画シンポジウムの感想)	酒井克也	14
「現代社会における宗教の役割」を考えるということについて		
考えることで何が拓けるか	荒川 歩	16
科研費プロジェクト成果の初披露に参加して	具志堅伸隆	17
初めて日本心理学会に参加して	徳野崇行	19
宗教心理学に関する二つのシンポジウムに参加して	小泉晋一	20
コラム 関西地区勉強会だより:それぞれのコスモロジーとの調和を目指して	中尾将大	21
事務局からのお知らせ		24

第 11 回研究発表会報告

日本心理学会第 77 回大会公募シンポジウム:宗教心理学的研究の展開(11)

—現代社会における「宗教の役割」について考える—

報告 中尾将大(大坂大谷大学)

1. はじめに

2013 年 9 月 19 日に北海道札幌市にある札幌コンベンションセンターおよび札幌市産業振興センターにて日本心理学会第 77 回大会が開催されました。このたび報告者は不肖ながら、宗教心理学研究会主催のシンポジウムをメイン企画者として企画をさせていただきました。企画を進める過程で、研究会事務局の松島公望先生には

大変お世話になりました。宗教心理学研究の先輩として、非常に多くのアドバイスをいただき、私の至らぬ点をおおらかに受け止めてくださり、シンポジウムの実現まで導いていただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

当日はメイン会場から少し離れた棟での開催となりましたが、総勢 37 名の先生方にご参加いただきました。会場の係員の方の話ではシンポジ

ウム開催の途中で、参加者が入れかわり、立ちかわりされていたとのことです。最後まで会場におられた方と合わせるともっと多くの先生方に足をお運びいただいたこととなります。このことは、社会科学を旨とする心理学会において、「宗教」という事象にまつわる研究は敬遠されがちであったというこれまでの状態を鑑みたときに、非常に画期的な現象ではないかと思われました。このことは、心理学者も宗教や信仰、宗教にまつわる行動などに関心を示し、本腰を入れて取り組み始めたということを反映することではないかと思えます。シンポジウムは松島公望先生の司会で始まりました。まずは企画代表者として、中尾から、今回の企画趣旨について説明をさせていただきました。以下にその内容を示します。

『昨年日本心理学会の学術大会に参加いたしました。『宗教』あるいは『宗教性』というものに関するワークショップや発表が思いのほか、多く開催されていたことに気がつきました。これは、『宗教』という事象が少なくとも心理学において関心を集めていることを反映していると考えられます。現代社会において宗教が人間の心理や行動に与える影響は依然、大きいのではないのでしょうか。』

これまで宗教にまつわる事象について心理学からのアプローチは本研究会も含め、活発に議論が巻き起こり、研究活動がなされてまいりました。しかし、宗教学の方からのアプローチは私の印象では少々弱いのではないかと思われました。過日の宗教学会においても宗教学から宗教性や信仰にまつわる心理・行動にアプローチするという立場の発表は少なかつたように思いました。

宗教心理学には古くから「心理学的宗教心理学」と「宗教学的宗教心理学」の2つの立場があることが言われてまいりました。両者はいわば「車の両輪」のようなもので、それぞれがお互いを補い合って、「宗教心理学」という車が前に進んでゆくものと思われまます。現状では宗教学の車輪がやや前に進んでいるのではないかと思われまます。そこで、本シンポジウムでは現役の宗教者でもいらっしゃるお三人の先生方に宗教が人間

の心理や行動に与える影響についてご発表いただき、フロアの皆様と共に、改めて「現代社会における宗教の役割」について考えてみたいと思えます。』

企画趣旨の説明の後、セッションに移りました。ご発表の詳細はすでに研究会 HP に掲載されている各先生方の当日資料に譲るといたしまして、本報告では「指定討論者」としての報告者のコメントを中心に私見を交えて報告することをお許しいただきたいと思えます。当日、報告者に与えられた役目は「宗教学の立場から指定討論をせよ」ということでした。

2. 各先生のご発表

最初に『仏教の立場から「宗教の役割」と考える』と題して曹洞宗総合研究センターの平子泰弘先生からご発表をさせていただきました。ご発表をお受けして感じたことですが、仏教は日本神道と共に、現在でも日本人の文化や生活習慣に大きな影響を与えている宗教であると思えました。ご発表の中でも触れられていたのですが、仏教は、各時代に応じて社会からの求めにおおらかに応じてきたのではないかと思えます。では、現代社会において仏教は何を求められているのでしょうか。それは、災害や人災、病や死など、古来より人類が遭遇してきた苦難に対する心の「癒し」や「救い」という点では一貫して変わっていないのではないかと思えます。

曹洞宗の先生のご発表を拝聴して大変恐縮でしたが、ご発表の後半における「東日本大震災発生に対する僧侶の活動」の所で思い起こしておりましたのは、浄土宗の開祖、法然上人のことでした。比叡山におられた頃、法然上人は京都嵯峨にある清涼寺せいりょうじに参籠さんろうされました。その時、戦乱や疫病などに見舞われ、多くの人々が救いを求めて清涼寺に押し寄せていたと伝えられています。お寺の周辺には黒衣をまとった僧侶が滞在し、それらの人々の話に耳を傾けていたと言われます。現代でいう「カウンセリング」のようなものでしょう。若き日の法然上人も上記のような活動をされていたようです。その体験も法然上人が「万人救済の道」を求められた動機の1つと考え

られています。

「後生の一大事」という言葉がございますが、人間はいつか必ず死にます。「死への恐怖」ばかりでなく、「死後は一体どうなるのか」ということは現代でも大きな問題ではないでしょうか。「葬式仏教」というキーワードがご発表の中にありましたが、葬儀は死という現実と向き合ったり、死を受け入れる、また、人間の死というものを考えさせられる重要な儀式ではないかと思えます。仏教、特に日本仏教はこの「人間の死」の問題に対応してきたのではないかと思えます。これから死にゆく人、遺された人、それぞれの立場で「死」と向き合わねばなりません。人間の「死」にまつわる様々な苦しみや悩みからの「救済」にこそ、これからも仏教が果たしてゆく大きな役割ではないかと思えます。そのためには「葬儀」の他にも法然上人がされたであろう、相手の気持ちに寄り添う「傾聴」^{けいちよう}による寺院相談活動など、新たなアプローチが求められてゆくのではないかと思えました。

次に『現代社会における「宗教の役割」と考えるーキリスト教の立場からー』と題して南山大学の西脇良先生よりご発表をいただきました。ご発表の冒頭は日本にキリスト教が伝来して以来の歴史および、キリスト教系のミッションスクールの歩みについて触れられていました。思えば、キリスト教が日本に伝わったのは戦国時代です、仏教伝来よりも随分あとの時代のことでした。江戸時代の300年間は、我が国は国策として「鎖国」をおこない、キリスト教国との交渉を絶ち、キリスト教を全面的に禁止していたことを思えば、日本人にとってキリスト教は比較的「新しい宗教」と言えるのかもしれませんが。江戸時代を通じて禁止されてきたキリスト教ですが、学会に参加する直前に偶然、新聞で以下のような興味深い記事が掲載されていたことを見つけました。

ある旧家の土蔵の壁から竹筒にいれて塗り込められていた「聖母マリアの肖像」が発見されたとのことでした。分析の結果、安土桃山時代にヨーロッパで描かれたものであることが判明しました。おそらく、キリスト者であることが明るみになると命の危険にさらされることがわかった持ち主

が、「せめてマリア様の肖像だけはお守りしたい」との思いから焼き捨てたり、破り捨てたりすることなく、密かに隠したのではないかと思われれます。作品のテーマは十字架から下ろされるキリストの姿を悲しげに、切なげに眺める母、マリアの姿が描かれているとのことでした。報告者には当時のキリシタンが表立って信仰の表明ができずに、泣く泣く十字架やキリストやマリアの肖像を埋めたり隠したり、捨てねばならなかったことに対する深い悲しみを象徴する絵と覚えてなりませんでした。

そのような弾圧の歴史を持つ我が国のキリスト教ですが、明治以後はミッションスクールという形で確実に根付いたと思われれます。発表者も小学校から大学院修士課程までキリスト教のミッションスクールで育ちました。しかし、洗礼は受けておりません。私は仏教徒です。しかし、18年間にわたって受けて参りました、「キリスト教教育」は確実に私の人生に大きな影響を与えたことは確かです。

私事で恐縮ですが、西脇先生のおられる南山小学校に別件で訪問したことがございました。非常に温かで優しい雰囲気、素晴らしい小学校という印象でございました。私の出身のカトリック・ミッションスクールとよく似た雰囲気、懐かしく感じました。そして、ご発表の中で語られた小学校の教育理念「かけがえのないあなたと私のために」(南山学園の共通理念「人間の尊厳のために」)や学校生活の中で「お祈り」を取り入れたカリキュラムにも非常に共感を覚えました。

私の経験で恐縮ですが、小学校、中・高、大学とそれぞれの学校で「スクールモットー」があり、その理念のもとに、教育を受け、その理念が私のその後の人生の強固な礎になっていたということに、ご発表を拝聴して気づかせていただきました。小学校では「隣人愛」、中・高では「地の塩・世の光」、大学では「奉仕への練達 (Mastery for service)」でした。この3つの理念は私の中で一本の線につながっております。すなわち、隣人を己自身のように愛し、自分のことは後に回して、他者を優先し、自ら持てるもの(能力)を世の奉仕のために使う。その行為がやがて、神の栄

光に寄与することになるという生き方です。

例えば、塩は使ってしまうと、なくなります。火^{とも}火^びもやがて消えてしまいます。しかし、その果たした役目は永遠に残るのです。塩や灯火が時空を超えて人類の生活に役立っていることは自明のことでありましょう。物理的な塩や灯火は時代とともに変化しておりますが、それぞれの役目は同じなのです。自己犠牲は痛みを伴い、できれば他の誰かに代わってもらいたいものです。しかし、己を犠牲にすることで他者が生かされ、そのことによってかえって新しい命(永遠の命)が与えられるのです。

これまで、私は人生の途上で生きることが困難であると思えるほどの、大きな苦しみや悲しみに苛まれることがございましたが、ミッションスクールでの「教科教育」ではなく、「宗教教育」が全てを乗り越えさせてくれた原動力となっていました。クリスチャンであるとか仏教徒であるとかではなく、ミッションスクールにはそれらを超越して「人間の素晴らしさ」、「力強さと優しさ」、そして「生きる希望」を与えてくれるという役目が今も果たされているのではないかと思います。ご発表の後半に南山小学校の至るところに太陽光が教室に差し込んでくるお写真を拝見し、子供たちは常に「神の気配」を感じながら育まれてゆくのだなと感じたことでした。

最後に日本神道の立場から宗教の役割について出雲大社と貴講社の酒井克也先生からご発表を頂きました。個人的に日本人でありながら、日本神道については、ほとんど知らないというのが正直なところでした。したがって、ご発表の中にあつた、「水に流す」あるいは「縁結び」など、日常的に神道の思想が生活の中に溶け込んでいることについて大変興味深く聞かせていただきました。

私自身は、神社仏閣が多く存在する関西在住ということもあり、神社へのお参りは今でもよくしております。手と口を濯^{ゆす}いだ後、本殿に向かい、柏手^{かしわで}をたたいて、神々をお願いをしたり、緑豊かな境内に身を置くことで気持ちがリラックスするという体験はよくしております。そのような体験から、ご発表の後半で『自然環境や先祖の御霊を

すべて「神々」として敬い、その恩恵を平等にいただき、感謝する生き様』述べておられましたが、古来、日本人のライフスタイルとして信仰が特別に意識しないところで残っているのではないかと思います。

しかし、自然のあらゆるものに神が宿り、その恩恵のもとに生かされているという感覚は、科学文明に生きる現代人にはなかなか明確に自覚されるものではないのでは、と思われまふ。科学の世界では環境を操作し、人類が主体性を持って世界と関わっていくという世界観ではないかと思ひます。ご発表の中でも触れられていましたが、そのような世界観ではやがて人類は自己中心的で、資源の消費を旨とする欲望追求に走るようになるのではないかと思います。現に我が国を含め、先進国の現状を見ると上記のような傾向にあると言えるのではないのでしょうか。自分さえよければ他はどうでもよい。ひとたび、市街や公共交通手段の中に身を置くと、理屈なしで人々の「極端に自己の利益を重んずる傾向」を垣間見ることができるでしょう。そこには人や世界との「つながり」はありません。結果として現代人は世界の中で孤立し、言いよう無い孤独感と虚無感に苛まれていたのだと思ひます。人はあらゆるものとの「つながり」の中で自己の存在感や価値を見い出せるのではないのでしょうか。

しかし、東日本大震災以降、現代人は自分の力ではいかんともしがたい現実がこの世界には存在することに気がついてきたのではないかと思ひます。私事ですが、この学会が開催される直前に関西では台風 18 号による被害が甚大でした。我が家の近くでも河川が増水し、一部避難勧告が出されました。私はその時、自然を前にして人間はなんと無力なものかと思ひました。同時に迫り来る台風に対してなんの統制もできないことも自覚したものです。

縁結びや願い事をするのはこのような人類自身の「無力さ」や「愚かさ」の自覚の表れではないかと思ひます。そこに、物質中心的で、欲望追求型の生き方への反省が生まれてくるのではないかと思ひます。その時、人類は人や世界とのつながりを回復し、利害を超えた、言わば共に生き、

共に栄えるという「共生」ともいえる価値観に目覚めることができるのではないかと思います。日本神道にはその価値観に目覚めさせる可能性があるのではないかと思います。そのための具体的な方法がこれから求められると思います。「現代社会に開かれた神道」が今後の新しい形になるのではないかと期待を抱かせてくださったご発表でした。

もう一人の指定討論者は武蔵野美術大学の荒川歩先生でした。先生からは、「心理学の立場から」指定討論をしていただきました。先生は冒頭、登壇者の先生方が全て宗教家でもある事に触れられ、「人生を宗教に捧げている人を前に何を語ろうか」と悩んだことを述べられました。その意味する所は、お三人の先生方のご発表から、それぞれの宗教家としての生き方がすでに人や社会に対して影響力があり、個々の宗教家としての実践が「役割」としてのリアリティーがあるということでした。

そして、この度のシンポジウムの標題『現代社会における「宗教の役割」について考える』の宗教の役割の部分にカッコが付いている点を指摘され、これがポイントではないかと述べられました。すなわち、このカッコには宗教を外側から眺めた場合、「社会的に何か言われるのではないか」という懸念の表れともとれると述べておられました。そこから宗教の持つ 2 つの属性が見えてくるということでした。1 つ目はナラティブ(物語)です。各宗教におけるナラティブはすでに機能していると言えるでしょう。もう 1 つはリアリティーです。これは例えば、神の存在の有無や死後の世界についての議論ということになります。すなわち、神の存在や死後の世界をリアルに感じることができるかどうかという問題ということになります。

そのような属性を持つ宗教ですが、荒川先生のご関心は「宗教に何ができるか？」ということでした。すなわち、先生は個人的に「宗教を無視して心理学はありえない」と考えているからであると述べておられました。そのような視点に立つと、宗教とは「生き方」であると捉えることもできましよう。すなわち、登壇者の先生方の動作等に宗教

家としての生き方を垣間見ることができたとのことでした。当日のご発表では、登壇者の先生方は普段対象とされている信徒さんや檀家さんへ向けたお話とは違う「語り」をしていただいたと思います。そこには宗教としての普遍性があるのではないかと荒川先生は指摘されました。心理学としてはその普遍性にこそ、ブレイクスルーがあるのではないかと述べておられました。普遍性とはすなわち、どの宗教にもスピリチュアリティや癒しといわれるものがあり、人がそれらに触れることで心の安らぎや癒やしが得られれば、それはそれで良いことではないかという点でした。

以上を踏まえ、宗教の役割とはそれぞれの実践において答えが出ているのではないかと述べておられました。もし、できれば登壇者の先生方に具体的に「宗教が役に立っているなど実感した瞬間」というものがあれば、話してもらいたかったと締めくくられました。

3. 各先生方の「宗教が役に立っていると実感した瞬間」の体験談

荒川先生のご発表を受け、司会者の松島公望先生より、登壇者の先生方おひとりおひとりから具体的に「宗教が役に立っていると実感した瞬間」について語っていただくよう提案がされました。

酒井先生(日本神道)は、これまでのご自身の人生を振り返ると、偶然とは思えないようなことが起こったことを述べられました。これはユング心理学における「シンクロニシティ」と言えるものかもしれないとのことでした。そこには人智を超えた導きのようなものがあるように見え、それが人と人のご縁を結ぶのではないかと思う瞬間があったと。また、先生は修士まで臨床心理学を専攻され、現在もカウンセリングをされておられ、カウンセラーとして本当に如何ともしがたい人生における苦難を受けてきた人々のお話を聞いてこられたそうです。その過程において、時にカウンセラーとして受け止めきれない場面もあったとのことでした。そのような時、人智を超えた存在(神)を介在しないと難しい場面が多々あることを実感していると。その時、ありがたいとよく思うのだが、

ありがたいとはありにくいという意味で、人生まさに「ありがたし」の連続であると結ばれました。

続いて西脇先生(キリスト教)は南山小学校のある児童のエピソードを語ってくださいました。その児童は「他の人には絶対に話さないで」と先生と約束をした上で自分の「ひみつ」を語ってくれたそうです。教師という職業者としては児童の「ひみつ」を担任やその他の教員に語らないことはいけない行為かもしれないが、キリスト教の司祭としての役割を強く感じたとのことでした。すなわち、世間の役割や価値観を超えて、信仰を貫くという司祭としての生きがいを感じたとのことでした。

最後に平子先生(仏教)からは、寺の住職として、結果的に役立っていたのかなと思われたエピソードを披露してくださいました。それは葬儀やその後の供養という儀式を通じて、後々になってご遺族から「今になって思うが、和尚さんがいてくれてよかった」と言ってくださることがあるということでした。その時、ご遺族にとって自分がそこにいたことがその人にお役に立っていたのだなと実感したと。あるお婆さんは突然に長年連れ添ったご主人を亡くされました。平子先生はそのお婆さんに寄り添い、一緒にいて差し上げたことがその人にとって「いてくれてよかった」と思っていただけだそうです。お婆さんからそのように告げられた時は気恥ずかしく思ったが、ご自身の存在が役に立ってよかったと思われたとのことでした。

また、東日本大震災の後、僧侶による心のケアが被災者の方々を対象にされているのだが、中にはご家族のご遺体が見つからないご親戚や知り合いに遠慮して、遺体が見つかった自分の家族の葬儀が出せない^{しょうじい}と心の苦しみを僧侶に吐露される方もいらっしゃるとのことでした。そのような話を聞いたとき、僧侶も必要とされているのではないかと思われたそうです。

4. 質疑応答

このセッション後、フロアとの質疑応答に移りました。最初に大学院生の方が挙手をされ、最近参加した芸術的祭典であるアーティストの作品を見て人間の生死について考えさせられた経験を披露され、登壇者に意見を求められました。その

方のご覧になった作品はポートレートで作者の亡くなったお婆さんにまつわる映像を集めたものでした。そこにはお婆さんの臨終の映像やお元気だった頃の映像も入っていたそうで、生者と死者という関係を感じたそうです。ポートレートの作者もお婆さんの死をきっかけに人間の生死をテーマにされるようになったそうです。この作者のように現代人は身近な人の死をきっかけに生死の問題について考えるようになるのではないかと指摘されていました。この話題について平子先生から仏教では生死一如と説かれ、生きることと死ぬことは別物ではなく、表裏一体のものであるとのことでした。このことから、作品を通じて作者は故人と遺族はつながっているというメッセージを伝えたかったのではないかと応答されました。

次に挙手された先生からは発表についてのご感想をいただきました。登壇者の先生方のご発表は「座標軸をどこに置くのか」という点においてひとつの線で結ばれるのではないかと感じたとのことでした。すなわち、宗教では人智を超えた存在＝神から他のところに視点を移すということになりましょう。物理学者のアインシュタインも述べていたそうですが、視座を変えることで世界の見え方が変わると。宗教はそのことを教えてくれているのではないかと述べておられました。具体例として自分と他者との関係についてあげておられました。すなわち、自分の視点だけで事象を捉えるのではなく、時に相手の立場に立って事象を眺めると見え方が変わるのではないのでしょうか。自己の欲望追求型の生き方ではいけないなど、柔軟性を自分の中に持つことの大切さが気がつくことでしょう。

他にご質問をされる先生もいらっしゃいました。内容は「葬式仏教」と言われるようになったが、葬式をされなかった遺族はどういう気持ちでいるのか教えて欲しいというものでした。特に東日本大震災以後の日本において、葬儀は重要な意味を持つと思われるので、葬儀を選ばなかったことによってどのような気持ちでいるのか興味強く惹かれたとのことでした。このご質問については平子先生が応答されました。先生のお仲間のお坊さんから聞いた話だが、葬儀をしなかった人はそ

の後、「家族の死」というものを受け入れられない状態に陥ってしまったと。その方の亡くなった家族は生前、「葬儀はいらない」とおっしゃっていたので、葬儀はしなかったが、残された人が「葬儀」という儀式を通して、故人の死を受け入れてゆけるのではないかと考えたそうです。結局その方は葬儀を後から行い、少し心が落ち着いたとのことでした。

その他、東日本大震災の被災地では火葬がすぐにできる状態でなかった場合、仮埋葬をして、2,3年後にご遺体を掘り起こして火葬することになっていました。しかし、ほとんどの遺族が1年も経たないうちに掘り起こして火葬されたそうです。葬儀をすることで遺族は「ようやく故人が成仏できる」と安心されたそうです。このエピソードも葬儀は死を受け入れるきっかけとなるという点で一致しているのではないのでしょうか。

最後に各宗教において「他者」をどのように捉えているのかという質問がありました。例えば、キリスト教では自分と他者は共に神に愛されている存在として捉えているとのことでした。それでは日本神道と仏教では他者をどのように捉えているのでしょうかというものでした。各先生から回答を頂きましたが、時間の関係で一言ずつということになりました。西脇先生からはキリスト教における他者観について回答を頂きました。人間は神によって作られた被造物であり、他者とのつながりということで人間に限定せず、あらゆるものは等しく、神によって作られた「命」として捉えているとのことでした。

平子先生からは、仏教では縁起説が説かれ、その説によると、色々な原因と条件が整って今、「私」という存在があるに過ぎないという視点に立つのだと。したがって、何か絶対的なものがあるとは言わないと述べられました。報告者はこのお言葉を受けて、仏教における「非我・無我」を想起しておりました。すなわち、永遠に変わらない(と)思い込んでいる)自己は今仮に縁^よって起^おこった存在に過ぎず、絶対的なものではありません。したがって、仮に構成され、永遠に存在すると思込んでいる自己は本来存在しないのですから、自己と他者との間には境界線はなくなります。すな

わち「無分別^{むぶんべつ}」ということになるのだと思います。それは永遠に変わらず存在すると思込んでいる自己の殻が破れるので他者とのつながりを感じられるようになり、自己と他者を区別しなくなるということになるのではないかと思われました。そこから自と他の区別がなくなりますので自ずと慈しみ(いたわり)の心が起こるのではないかと思ひます。

最後に酒井先生から単純明快なお答えをいただきました。すなわち、神道ではシンプルに私も神様、他人も神様ということでお互いを神として尊重し合うのだと。そこから「お互い様」という言葉が生まれたそうです。

シンポジウムの締めくりに司会の松島公望先生から総括をしていただきました。それは、宗教を信じる前にまずは「知ること」が大切であることだと。松島先生によると日本人は「宗教音痴」ではないかと。すなわち、宗教を知らない宗教音痴であるからこそカルトに走ったり、マスコミに踊らされたりするのではないだろうか。宗教を「知る」ことでそのような状態に陥らずに済むのかもしれない。宗教を知るためには宗教を実証的に示す必要があると述べておられました。松島先生は、事務局をされている宗教心理学研究会の活動は今後も実証性を重んじた宗教心理学の研究活動を展開していきたいと述べておられました。

5. 結びにかえて

このたびのシンポジウムは、科学を背景とした心理学会にて、真正面から「宗教」というこれまで科学とは真逆の価値観を持つ事象について考えてみるという画期的な企画ではなかったかと自負しておりました。冒頭でも少し触れましたが、当初は参加人数が少ないことや企画に対して厳しいご意見や痛烈なご批判を頂戴するのではないかと懸念しておりました。しかし、そのような予想に反して、本当に多くの方々にご参加いただき、心理学や宗教学という立場を超えて、真剣で白熱した議論が展開されました。むしろ学問の興味とテーマへの共感を持ってご参加いただけただよう嬉しく思っております。

その後、有志で登壇者の先生方を囲む懇親会

が札幌市内にて開催されました。会場にて更に濃密な議論となりましたが、その中で今回のテーマについて問題提起がなされました。それは、この度のシンポジウムでは、宗教の持つ良い役割についてのみに焦点を当てられていましたが、宗教の持つマイナスの面(役割)についても議論がされるべきではないかということでした。例えば、どの宗教においても信仰を持ち、信仰生活の歩みの途上で苦しんだり、悩んだりすることもございま

す。信仰にまつわる心理的な葛藤といわれる部分も宗教の持つ重要な側面ではないかということです。「宗教の役割」という大きなテーマの中で議論すべき重要なサブテーマではないかと思いました。今後、機会があれば是非とも別のシンポジウムとして開催できればと思いました。以上拙い報告となりましたが、ここで筆を置かせていただきたいと思えます。

日本心理学会第 77 回大会公募シンポジウム報告 宗教性／スピリチュアリティと精神的健康の関連(1)

浦田 悠(京都大学)

今回の研究発表会の企画は、本会のメンバーが中心となって実施されている「宗教性／スピリチュアリティと精神的健康の関連」の研究プロジェクト(科学研究費補助金・基盤研究(B), 課題番号: 24330185, 研究代表者: 松島公望)の概要を紹介し、それらを基に、日本における宗教性／スピリチュアリティと精神的健康の意義や可能性について議論することを目的としていた。

当日は、最終日の夕方にも関わらず、20名余の参加があり、話題提供後にも活発な討論がなされた。

企画・司会・進行は、松島公望先生(東京大学)が担当され、松島先生から以下のようなイントロダクションをいただいた。

この科研プロジェクトには、まさに学際的というべき様々な分野から、さまざまな宗教的なバックグラウンドを持ったメンバーが集まっている。また、方法論としても、質的アプローチと量的アプローチの双方から研究を進めていくということも特徴的である。

かねてより日本人の宗教性／スピリチュアリティを捉えることの難しさが指摘されてきており、また、実際の研究も少ない。加えて、宗教性／スピリチュアリティについての研究のほとんどは、主にアメリカのユダヤ・キリスト教文脈に基づいた研究に偏っており、それ以外の地域のそれに

ついて検討していくことが国内海外問わず求められている。このような現状において、本科研プロジェクトは、我が国においてこれまでにない規模と連携がなされているという点で意義が大きいと考えている。

さらには、2011年3月11日の東日本大震災後、日本人の宗教性、メンタリティとは何か大きな議論となり、また、被災地における宗教者の活動にも注目が集まっている。ここでは、宗教的ケア、スピリチュアルケアについて、まずその意味するところを検討し、現場でなされている宗教者へと提供することを目指している。

この宗教性／スピリチュアリティという概念を学際的に考えるとすれば、構成概念・思想の部分は哲学、神学、宗教学が支え、実証・エビデンスの部分は社会学と心理学が支え、現場では、医療、看護、介護、福祉がそれらを活かすという役割分担をすることが効果的ではないだろうか。このプロジェクトをきっかけとして、さらに研究を広げ、深めていきたいと考えている。

以上のようなイントロダクションを踏まえ、3者による話題提供がなされた。

【話題提供】

1. 「質的研究班に関する報告」: 浦田 悠(京都大学大学院教育学研究科)

浦田は、本科研プロジェクトの質的研究班のメンバーに所属している。発表では、現在質的研究班で進めている研究の概要と現時点での成果を報告した。質的研究班では、川島大輔氏(北海道教育大学)を班長とし、浦田と武田正文氏(浄土真宗本願寺派僧侶)の3名で、理論研究、フィールドワーク、文献検討を行っている。質的研究班の目的は、「喪失経験を通じた意味の再構成と宗教性／スピリチュアリティの関連」である。本班では、震災による複合的な喪失において、多様な意味の再構成プロセスをとらえ、宗教的ケアの多声性を明示化することを目指している。質的研究法を用いるのは、その方法が、量的研究法では把握されにくい微妙なニュアンスや矛盾を見ることを得意としており、生のデータに基づいて、帰納的な理論生成を行う点が、目的に合っていると考えられるためである。

研究における理論的背景としては、喪失経験における意味再構成に関する理論(e.g., Gillies & Neimeyer; 川島)や意味生成モデル(Parks)などを軸に置いている。これらの理論は、いずれも、何らかの喪失経験やストレスが発生し、苦悩が生じた際に、いかに新たな意味を構成しうるのか、ということに関するモデルである。

質的研究班では、これまで東北と関西でフィールドワークを行ってきた。東北においては、フィールドワークとともに、東北大学の実践宗教学寄附講座でのヒアリングと意見交換を行った。関西においては、阪神大震災後から現在に至るまで、どのような宗教的ケアが見られ、また、震災からの復旧・復興に伴って、そのあり方がいかに変容してきたのかを探るべく、フィールドワークとヒアリング(インタビュー調査)を実施した。インタビューでは、慰霊法要を続ける宗教者と、その法要を続けるまちづくり団体の代表者へのインタビューを実施した。宗教者へのインタビューでは、震災によって大切な人やものを失った人々への宗教的ケアの実際や、宗教的ケアに対する意見について聞いた。団体の代表者には、阪神大震災時のご自身の様子と現地で活動するに至った経緯、慰霊法要との関わり等について聞いた。

これらの活動によって、「宗教的ケアといわない宗教的ケア」、すなわち、明示的に宗教性は出さない関わりとしての宗教的ケアがなされていること、また、現代の宗教的ケアの特徴としては、単なる傾聴ではなく、積極的に関わる姿勢が重視されていることが明らかになってきている。

今後は、引き続きフィールドワークを進めるとともに、宗教／スピリチュアリティと災害(による喪失)についてのレビュー論文と、「宗教的ケア」の概念をめぐる多声的意味についての往復書簡論文の執筆を進める予定である。

2. 「数量的研究班に関する報告①:班活動全体の報告」:徳野崇行先生(駒澤大学)

話題提供2では、徳野先生から、本プロジェクトにおける数量的研究班の調査概要についての説明がなされた。ここでは、まず予備調査の実施状況についての報告がなされ、次いで、これから実施される本調査の概要についての報告がなされた。

数量的研究班の予備調査においては、宗教観尺度・宗教的行動尺度・諦観尺度・スピリチュアリティの信念尺度・死別後の主観的変化尺度・死観尺度・主観的幸福観尺度などの質問項目を用いた調査が実施されている。

予備調査では、4種の調査票(A①②・B①・B②・C)が使用されており、AとBについては大学で、Cについては、寺院と大学で調査が実施されている。

本調査における調査対象者としては、大学生までにおいては、プロテスタント系・カトリック系の中学校・高校・大学が対象となり、成人の対象者としては、一般成人、プロテスタント信者、カトリック信者、曹洞宗檀信徒、神道信者などが対象となっている。また宗教者についても、キリスト教の牧師、カトリック司祭修道士・修道女、曹洞宗僧侶、出雲大社教布教師などが対象とされている。

以上のような調査により、今後は、宗教性／スピリチュアリティと精神的健康との関連を数量的な観点から検討する予定となっている。「宗教観尺度」「スピリチュアル現象尺度」「キリスト教的宗教意識尺度(キリスト教のみで使用)」「主観

的幸福感尺度」「スピリチュアリティ質問項目」については、それぞれの尺度の関連および差異を検討する。

「宗教的自然観」と「精神的健康」の自由記述式の質問項目は、それぞれ内容が近い項目を分類・整理して、宗教的自然観および日本人の精神的健康の特徴をまとめる。

3. 「数量的研究班に関する報告②: 予備調査データ分析報告」: 具志堅伸隆先生(東亜大学)

具志堅先生の発表では、「宗教性／スピリチュアリティと精神的健康の関連-量的調査からの検討-」という題目で報告がなされた。

本報告の内容は、先の徳野先生の話題提供でも取り上げられた、「宗教観尺度」と「スピリチュアル現象尺度」を使用した研究である。まずは、具志堅先生が作成された「スピリチュアル現象尺度」についての説明があった。尺度作成の過程では、オンラインストアのデータ(タイトル・内容紹介・読者レビュー)を参照して選出された300冊の本をもとに、内容を分析・整理して、出現頻度の高い内容を特定した上で、6つのカテゴリー(①魂の永続性, ②輪廻, ③神の守護, ④心象の現実化, ⑤因果応報, ⑥人生の意味)が抽出されている。このうちの④～⑥の項目によって作成されたのが、「スピリチュアル現象尺度」である。因子分析の結果、これらのカテゴリーに合う因子が見出され、確認的因子分析でも整合的な結果を得ている。

「宗教観尺度」についても、因子分析が実施され、「霊魂概念」「向宗教性」「加護概念」の3つの因子が見出され、こちらでも確認的因子分析で妥当な結果を得た。

この2つの尺度をもとに、上の2つの尺度の6つの下位尺度を説明変数とし、「主観的幸福感」および「健康状態指標」を目的変数とした重回帰分析(ステップワイズ法)を実施した。結果、主観的幸福感と健康状態指標(WHO-5)いずれにおいても、人生の意味に有意な正の効果が見られた(男性のみ)。

次に、宗教観尺度を説明変数、スピリチュアル現象尺度を目的変数とした重回帰分析を実施

した結果、どの場合においても、「霊魂概念」が有意な正の効果が見られた。

まとめとして、男性の場合は、スピリチュアル現象の「人生の意味」を感じる事が、精神的健康と密接に結びついていることが明らかになり、人生で直面する出来事が、単なる偶然ではなく、何らかの意味や必然性がある生じていると考えることが、精神的健康を高めることにつながっていることが示唆された。

また、スピリチュアル現象に対する態度は、「霊魂概念」と強く結びついており、男性では、霊魂概念が「人生の意味」を高めることによって精神的健康を高めていることが示唆されたが、なぜ男性においてのみこのような結果が見られたのかについては、解釈が難しいとのことであった。

【質疑応答】

質疑応答のセッションでは、3名のフロアの先生から意見が出された。初めの質問は、具志堅先生の発表へのものであり、「精神的健康との相関はあるが、少し弱いのではないか」という質問であった。この点については、具志堅先生と松島先生から、「確かに相関は低い結果となったが、今回使用した尺度は、一般に広く利用されており、成果発信の際に有効と考えて利用した。この点については、考察の部分で慎重に扱っていきたい」という回答がなされた。また、同じ質問者の先生からは、「困難があったときに、宗教性が提供してくれるのを見るとすれば、それはレジリエンスの問題であると思われるので、新しい指標を考えてもいいのではないか」という提案があった。この点についても、松島先生より「今回は、自由記述もあるので、心の健やかさについても検討しているところであり、そこから積み上げて、日本人のメンタルヘルスについての研究を蓄積していきたい」とのことであった。

2人目の質問者の先生からは、「今回のプロジェクトでは、苦難について検討するという副題がついているが、現在使用している尺度では、その点も考慮できているのか。たとえば、Purpose in Life test (PIL)などの尺度を使うという選択肢はないのか。また人生の意味をテーマとしてい

る浦田さんは量的研究班には関わっていないのか」という質問があった。この点についても松島先生より「今回のプロジェクトでは、知見の蓄積とともに、期間内に成果を出すことも重要であるため、PILなどを利用した検討はなかなか難しいところがあるのかもしれない。時間をかけて積み上げるという点については、ボトムアップ的な質的研究が重要であると考え、浦田さんにはそちらに入ってもらっている」という回答がなされた。また浦田からも、「たしかに PIL は自殺念慮やうつなどとポジティブな関連が見出されていることもあり、精神的健康の指標として見るができるかもしれないが、情動や認知、動機などの側面が関わり合っており、どのように捉えるのが難しいところがある」と補足をした。

3人目の質問は、「宗教系の学校の生徒には、それほど宗教的な背景がないように見えるが、プロテスタント系や仏教系という学校の区切りに意味があるのだろうか」という趣旨のものであった。それに対し、徳野先生から「今回の対象となった中学生や高校生が信仰を持って学校に所属しているということを前提としていたわけではなく、それぞれの研究メンバーが候補を出したときに、これらの学校が選定されたので、便宜上このような分類となっている。また、それぞれの学校において宗教的な指導はまちまちであるが、そのような指導がどのくらい宗教性に影響があるのかということも今後の調査で見ていきたい」との回答がなされた。また、松島先生からも「調査対象者への還元という意味で宗教教育の効果についても捉えたいと考えている」という補足があった。

【感想】

本企画シンポジウムに参加させていただき、色々と学ぶことも多く、有意義なセッションを体験させていただいた。ここでは、主にフロアとの議論の中で出てきたことを軸として、若干の補足的な感想を述べたい。

上に報告したように、今回の科研の副題では「苦難への対処」ということがテーマとして掲げられていたが、その点についての指摘をフロアの

先生からいただいた。すなわち、主観的幸福感のみではなく、苦しみに対して人がどう意味を見出すのかということを見るとすれば、PILなどで苦しみへの対処というものを見ることができるのではないかと、という内容の指摘である。

私自身も、もし苦難への対処という点を検討するとすれば、主観的・情動的な幸福「感」とともに、意味や価値に関わること(幸福「観」?)を見るというのも重要なのではないかと考えている。宗教の心理的な機能として、自他の救済や世界や自己の意味づけという点があるが、もし、現に起こってしまったネガティブな出来事に対して、宗教がより大きな「意味」や「目的」を見出すことを助けているのか、という点を検討するとすれば、機会があれば、レジリエンスやハーディネス、一貫性の感覚(sense of coherence)の側面を、宗教性／スピリチュアリティとの関連で見ることも有意義ではないだろうか。勿論、今回使用されている主観的幸福感尺度や死別後の変化に関する尺度にも、いくつかそのような項目が含まれていることから、一定の検討は可能かと考えている。

個人的な印象であるが、宗教性／スピリチュアリティの研究は、単にヘドニスティックなポジティブ感情を高揚する方法について探るばかりではなく、人生の中で誰にでも起こりうる苦難に対して、宗教的真理に基づいて大きな物語を描き、苦楽生死を含めたエウダイモニックな自己肯定をもたらすものについて考究するという意義と役割を持っていると感じている。質的研究班でも、そのようなポジ・ネガを含めた(あるいは、ポジ・ネガの二項対立的な見方自体を見直す)視点からの研究を進めようとしているが、苦難への対処を踏まえた宗教心理学的な研究は、新しいポジティブ心理学と言える研究になるのではないだろうか(因みに、ポジティブ実存心理学を提唱するWongは、ネガティブな側面もしっかりと踏まえたポジティブ心理学を、「ポジティブ心理学 2.0」と呼んでいる)。今回のプロジェクトでどのような成果が出てくるか、メンバーに加えていただいた一人として楽しみにするとともに、質的研究班でも協同して成果を出していきたい。

「異なる座標軸」をもたらす可能性

西脇 良(南山大学)

先の宗教心理学研究会企画シンポジウム(日本心理学会第77回大会公募シンポジウム)では、「現代社会における『宗教の役割』を考える」というテーマが冠せられました。前年に実施された企画シンポジウムでの心理学研究者の参加の多さや、日本心理学会の機関紙『心理学ワールド』59号で特集「スピリチュアリティ」が組まれたことなど、宗教への関心が日本の心理学界でも高まりつつあることを受けての企画でした。まさに時機にかなった企画であったと思います。企画者の中尾将大さんと松島公望さんの時代を読み取る力に、深く敬意を表したいと思います。

今回は研究会メンバーの中で現在、神道、仏教、キリスト教の布教に従事する者によって話題提供がなされることになり、筆者はキリスト教(カトリック)の立場から現代社会における宗教の役割について発言するよう求められました。正直なところ、フロアの聴衆の多くが心理学研究者であることを思うと、小生の拙い信仰に基づく「思い込み」を語ることには大きな躊躇がありました。しかし、ここで何かを偽ったり飾り立てたりしても仕方がないだろう、思ったままを語れば良いだろうと思ひ直し、敢えて直球の発言を試みました。とはいえ、心理学研究者にとっても馴染みがあると思われる「学校教育」をテーマに据えることにより、フロアの違和感なり抵抗感なりを和らげようと意図したこともたしかです。テーマを「現代社会におけるミッションスクールの役割」と読み替えてのアプローチでした。

発表は前半と後半に分かれました。前半では「日本のカトリック教育の歩み」と題して、幕末期から明治期、大正期に至り、昭和初期および中期を経て、昭和後期までのカトリックのミッションスクールの歩みを概観しました。社会福祉事業の延長として、また富裕層への西洋式教育の場として開始されたミッションスクールが、二つの世界大戦を経て、現在、その宗教的アイデンティティどころか経営基盤さえ危ぶまれている現状にあ

ること、を紹介いたしました。

後半では、筆者がその設立に関与し、現在も「指導司祭」として勤務している東海地方の或るカトリック小学校(2008年開校)での実践を紹介しながら、教育において宗教が果たす役割を考察しました。まず小学校設立時に構想した、「施設設備・ひと・カリキュラム」の3領域の相互作用による宗教教育について紹介したのち、このうち中心的な役割を担うべき要素は「ひと」である、というところに力点を置きました。柔らかな調光に気を配った聖堂など、宗教施設設備が子どもに与える影響も少なからずあることでしょう。日に三度手を合わせて祈る習慣を身につけさせたり、宗教の授業や行事を計画したりするなどのカリキュラム構想も、子どもの宗教教育において欠かせない側面でありましょう。しかしながら、これら一つひとつ準備されたものに取り組む姿勢、子どもへの接し方などはすべて「ひと」によってなされるものであり、「ひと」によってしか伝達され得ないものでありましょう。その意味で、「ひと」である筆者の、教育に携わる者の一挙手一投足が、子どもの成長にとって善いものとなっているのか、という絶えざる問いと、自己改革の姿勢が求められる、ということを語りました。

筆者のいう「ひと」による宗教教育とはこの場合、神の存在や認識を論じる教育を指すのではなく、神が人間と出来事を通して働くその働きを、子どもに「運ぶ」教育のことをいいます。換言すれば、「神があなた(子ども)を大切にしている」ということを伝える教育のことです。発表当日はこのことを、或る児童との困難な関わり的事例を交えつつ考察しました。人はその淵源を神にもつのであるから、信じ、希望し、愛するに値する。このことを伝えるのが宗教教育です。「信・望・愛」の淵源が神にあり、人間の尊厳の淵源が神にあるというのは、しかし即座には受け入れ難いものの方でしょう。これはもはや、思想でも方法論でもありません。一種の賭けといえましょう。しかしそこ

にこそ現代社会における宗教教育の役割、ひいてはミッションスクールの役割がある、ということ、自戒の意も込めつつ申し述べ、発表を結びました。

他のお二人の話題提供も、それぞれ時機に合った内容を扱っておられました。平子泰弘さんは仏教の立場から、東日本大震災の発生後の仏教界の活動にもふれ、「死者と生者を結ぶ役割を有する僧侶・寺院」の必要性について語られ、フロアから大きな関心と呼んでおられました。酒井克也さんは神道の立場から、「神道ナラティブ」に言及され、神道のナラティブ(自然環境や祖霊を神々として敬い、その恩恵を平等にいただいていることに感謝する生き方をする)が、共生を模索する現代において必要である、と語っておられました。指定討論では、心理学の立場から荒川歩さんが、宗教学の立場から企画者の中尾さんが、それぞれ丁寧に論点をすくい上げ、的確な指摘を行ってくださいました。

フロアからの質問やコメントも活発に寄せられましたが、中でも印象深かったコメントをここで振り返っておきたいと思います。残念ながらどなたの発言であったか記憶しておりませんが、おおよそ以下のような内容でした。

「話題提供者 3 人とも共通していたのは、座標軸をどこに置くか、という点であったと思う。3 人とも信仰を前提としており、心理学というパラダイムでの発想とは異なっていた。ここで重

要なのは、信仰というより、『視座を他へずらす』ということである。宗教は、視座を別のところに移すことの重要性を我々に教えてくれている。」

このご指摘を受けたとき、はっとさせられたことを覚えています。特定の信仰に立脚しながら話を展開する 3 者の発表に少なからず違和感を覚えた参加者もいらっしやっただしょうに、この方は、少なくともそれを「噛み合わない話」とは捉えず、「異なる座標軸」と捉え、しかも「視座を他へずらす」意義として積極的に捉えておられたように筆者には思われたからです。

宗教心とそれに関連する現象を心理学的に捉えることと、特定の信仰に依拠しつつ世界と人間を語ることは、今後もお互いに異文化であり続けるでしょう。しかしながら、上記のコメントを寄せてくださった方のように、お互いを「異なる座標軸」と捉えることが出来るならば、交差する座標軸に布置されているものを捉え、表現し、語ることが可能となります。例えばそれは、フロアの議論にもありましたように、死生観でありましょうし、ナラティブでありましょうし、子どもの教育でありましょう。今後も、「異なる座標軸、しかし交差する座標軸」という視点を大切にしたいと思いました。

さいごになりましたが、出不精の筆者を引っ張り出し、議論に参加する機会を与えてくださいました松島さんと中尾さんに、深く感謝を申し上げます。ありがとうございました。

大スズメバチの猛毒を前にして

平子泰弘(曹洞宗総合研究センター:非会員)

猛暑の続く本州を離れ、秋のさわやかな風につつまれ、気分的にも「今回の発表は上手くいくかもしれない」と思いながら、シンポジウムに臨みました。とはいえ、これまで仏教学や宗教学、医療介護分野での学会参加しかない中で、自身初となる心理学分野での発表に多少の緊張と、呑まれないようにとの意気込みを持っていたことも

確かです。

今回は個人発表ではなく、司会の松島さんを始め、西脇さん、酒井さん、荒川さん、中尾さんと心強いメンバーとタッグを組めたことが、大きな安心になっていたことを改めて感じます。

さて、私は仏教の立場から「宗教の役割」を発表させていただきました。宗教学者がこれを論じ

る場合、そもそも論を初めとして 100 人いれば 100 通りの論が出てくるのではないのでしょうか？

網羅的にすべてを話すことも難しいことから、今回の「現代社会における」を手掛かりに「宗教が個人に与えるもの」、「宗教によって人々が得られるものは何か」に焦点を当て、発表内容をまとめさせていただきました。発表の中では、まず①宗教の存在意義としてこれまで宗教学で論じられてきた機能論を紹介させていただき、次に先の焦点に絞って、②日本の歴史の中にもみる仏教の果たしてきた役割の紹介、③現代における仏教の活動や置かれている状況の紹介、④今後求められていくであろう役割について、それぞれ述べさせていただきました。

概して通説的な内容ではありましたが、分野の異なる聴衆の方々に仏教の概略をお伝えできたと思います。また、特に現代における状況報告においては、葬儀・供養が大きく変化してきていることや、震災を機にして意識が変化したであろう事、震災後の各教団の活動など、会場の方々も関心を伴って傾きながらお聞きいただいていたように感じました。それは発表後の討論の中でも、このあたりの話題について、いくつか質問いただいたことにも表れていたように思います。

討論においてフロアからいくつもの質問が出されたことは、この問題に対する興味が大きいことを示すものだと思います。しかしその内容が、大変初歩的なものや自身の経験をふまえた感想、テーマとは異なる教義的な疑問などであったことは、多少ですが残念でした。とはいえ、それも含

め今回のようなテーマで日本心理学会においてシンポジウムを組めたことは、それを支える興味関心が向けられていることだと思いますし、そうした新たなテーマに対して、フロアの各研究者が自身の興味を示しつつ、疑問・感想をあえてぶつけてくれたことに、今後の発展に光を見出すことができると考えます。そして、ありがたいことに、おおくの聴衆が集まり、レジュメが不足する事態になったことと、シンポジウムの雰囲気がとても温かく、「ここは暖かい村だな～」と終わった後の充足感を感じられたことは、アウェーの存在としてはホッとできた次第です。

終了後すぐに松島さんと「すべては、これからですね！」と話しましたが、まさに心理学畑における扉が開かれた感じがいたします。ここまでのみなさまのご努力にも敬意を表しますが、ここからが正念場となるように思います。

とかく日本人は宗教心がないとか、信仰を持っていないと表現されながら、初詣をし、合格祈願をし、お守りを持ち、おみくじ・占いに一喜一憂しています。そんな心の裡がこれから顕かにされていくことを楽しみにしておりますし、微力ながら加担できれば幸いです。

そんな今後の抱負や今回の反省を、みなさんと札幌駅で話しているところに妻から「大スズメバチに刺された。これから救急車に乗る」との連絡を受け、急遽帰路へ。私はそんな現実を恨みつつ、神仏にただただ無事を祈りこしかできませんでした。 合掌

神道のあり方を求めて 2013

(日本心理学会 宗教心理学研究会企画シンポジウムの感想)

酒井克也(出雲大社和貴講社)

去る 2013 年 9 月 19 日、札幌で開催された第 77 回日本心理学会において、わが宗教心理学研究会の企画シンポジウム『現代社会における「宗教の役割」を考える』が行なわれました。今回私は神道実践者の立場から、神道の役割につ

いて述べよとのチャンスをいただき、冷や汗をかきながら登壇させていただきました。開始時間直前まで、前の発表が行なわれていたこともあり、来場者がどれほどあるかと不安を感じながらの準備でしたが、始まってみると、用意したテキスト

が足りなくなるほどの盛況でした。有難きことです。

今回私は、現代の日本社会に浸透している「神道的なナラティブ」という要素に焦点を当て、「日本人のメンタリティ」というものをあぶりだし、そうした支配的言説は、実はこれからの世界にとって重要なメッセージとなるのではないかと結論付けたいと考えました。しかし、ご質問や反応から感じたことは、そういう正当化の理論よりも、「神道的」と呼べる言説の具体的な内容や出所のほうに興味をもたれたようです。

考えてみるとそれも当然でありまして、神道的な言説は、いつから、どこから生まれているのかなど、特定ができるものではありません。「はるか昔からある」という感覚であり、「日本らしさ」と漠然ととらえているものが「神道ナラティブ」なのだ、私が乱暴に言いきってしまっても、それを確かめるすべはなかなか無いわけです。

今回私が用意した「ナラティブの出所」としては、國學院大學(元学長)の安蘇谷正彦先生や石井研士先生の最新の研究のほか、明治期の南方熊楠の論説や先代旧事本紀(せんだいくじほんぎ)という、近代日本社会の中で多く語られ、伝えられてきた神道の解釈を取り上げました。これらの文献に、「神道とは、こんな感じだ」というイメージがふんだんに語られていると考えたからです。それでも、ほんのわずかな側面をなでただけの「薄い」発表となってしまいましたが、日本人にとっては当たり前すぎて、確認さえもされなかった支配的言説を意識化し、「日本らしさ」「日本人らしさ」というメンタリティをあぶり出す第一歩は、踏み出せたと自負しております。

この作業をする中で感じたのは、この研究には「外国人の視点」が必要であるということです。

異国から見たニッポンの特異性とは何か。諸外国の文化と比較して、何が面白いのか。そんな視点で、あらためて神道を語ることが、現代の日本人にとっても何か新鮮な感覚を提供できるのではないかという手ごたえも、今回つかめた気が致します。

その特異性の一つに、「言挙げせぬ」つまり、大事なことほど言葉や文字に表さないという思想があります。日本的メンタリティの一つに、真実の部分ほど明言しない、「言わなくてもわかるでしょ」という暗黙の了解があると思うのですが、その根源は、こうした「神道ナラティブ」にあるのではないか。だからこそ、「神道とは何か」ということを、神道関係者たちは明言してこなかったのではないかと、私は考えております。その意味では、私は「おきて破り」をしているのです。

そうした矛盾とも罪悪感とも言えぬモヤモヤ感を吹き飛ばしてくれることが、発表を終えたときにありました。敬愛する神戸親和女子大学の末田啓二先生が客席にいらしたことに、初めて気付きました。やはり自分は緊張していたことを実感し、緊張が解けたこともあり、散会後に走り寄って握手を求めました。その時に、「これからは、もっともっと神道の思想を明文化して、発信していくことが重要だ!」というお言葉をいただきました。…涙。これからも、積極的に「言挙げ」を続けて行こう、このテーマを研究の主軸に据えようと、堅く決心致しました。

その後の懇親会やホテルへの帰路での、諸先生方との熱い語り合い。今思い出しても、どれもこれも輝くほど貴重な、楽しい記憶です。このような機会を与えてくださったこと、あらためてここに感謝申し上げます。本当に、有難うございました。

「現代社会における宗教の役割」を考えるとということについて 考えることで何が拓けるか

荒川 歩(武蔵野美術大学)

1. ここで言われている宗教とは何かを自分なりに考えてみる

本企画は、「現代社会における宗教の役割」を考えるものである。宗教とは life (=生活・生命) 全体であり、信仰者にとっては、その宗教世界は、まさに外部のリアリティそのものを規定している。明らかに世界がそうであるからそうであるものである。心理学者が前提とするような比較したり、取り出したりできるものではないところがある。ある宗教の信者AにとってのXと別の宗教の信者BにとってのXとは要素としては同じであるように見えても、そのゲシュタルトの中での付置は本質的には異なるもので、単純に比較することができない。それは変数のように etic に扱えるものではないし、imic に感じ取ることしかできないだろう。

2. なぜ宗教は役割を果たさなければいけないのか?

そのように、確かに(たとえば神様がいると)感じていて、この世の中はそのリアリティによって構成されているのであれば、宗教が社会の中で役割を果たす必要の有無を考えるのはおかしなことである。既に信仰世界があるのだから、社会によって規定される役割ではなく、宗教によって規定される役割(たとえばその宗教のリアリティをより多くの他者の life と共有すること)を果たすだけで必要十分である。ではなぜ宗教に役割を求めるのかといえ、それは宗教家や宗教団体が社会の中のセクターの一つとして、社会から期待される役割があるからである。

3. 人はいつ「宗教が役割を果たしている」と感じるのか?

では、人はいつ「宗教が役割を果たしている」と感じるのだろうか。信仰のおかげで死や病いを少し受け入れられるとき? 信仰のおかげで悩

みをうまく消化することができたとき? 信仰のおかげで無用な争いを避けることができたとき? 信仰のおかげで自分の願いが叶ったとき? ここではわざと「信仰」に読み替えたが、宗教という外側からのとらえ方をするなら、「宗教のおかげで、葬式などの手続きがパッケージ化されてすませることができたとき」なんていうのもいれることができるだろう。これらは、信仰者にとって役割というよりも機能と呼んだ方がいいものかもしれない。

人は本来自由な存在である。私たちは、(その想像力は貧粗で、過去の経験から自由になれないとはいえ)どのようにも世界を解釈することができるし、どのようにも振る舞うことができるし、どのようにも生きることができる。「慣習や法律、そして世間の目に反しないこと」という前提がつくとはいえ、自由度はかなり大きい。ある出来事が起こったとき、私は、自分は第 8 次元からやってきた木工用ボンドの妖精でその出来事を仲間からの合図と捉えて、攻撃的に振る舞って破滅的に生きることだってできる。このように人の解釈・振る舞い・生き方は本来不定である。それに対して、宗教は、ある種の解釈の仕方、振る舞い方、生き方の理念と範型、考える方法を与えてくれる。その意味で、宗教とは art (多様な偶然の有り様の中から必然的な一意に決定する技術)である。特に、死や病いをこの世を越えた外在的な存在者の意思に帰属したり、この世を越えた外在的な世界へ存在する世界が移ったのだと説明するのは、宗教がなければ難しいだろう。

4. 宗教の本来の目的と、社会から求められる「役割」の要請との対話は可能か?

このような art が社会から求められるとしても、多くの宗教団体にとって、このような art は結果であって、「本当に肝心なところ」ではないのは、自明のことであろう。まさに存在するその世界(の

肝心な部分:たとえば神様の存在がひしひしと感じられ、そうではない可能性を想像することに困難を覚えるか)が共有されているのかが重要であり、宗教がある種の役割を果たしているか否かは、宗教に対する日本社会のネガティブな見方へのディフェンスとしての機能を果たす程度であるかもしれない。他方で、常に宗教者は、宗教者としての art を示すことを通してのみ、人々を信仰の道に導いてきた(リアリティを共有してきた)というのも事実かもしれない。

後者であるならば、宗教家の期待する「宗教が役割を果たしている」というのは、宗教家と市民のリアリティが宗教家の art の上でパチッと決ま

る瞬間かもしれない。しかし、真に信仰を持っているものであればこれを打算的に行なうことはできないだろう。信仰が外部のリアリティそのものを規定し、明らかに世界がそうであるからそうであるものである以上、宗教者が自分の信仰に照らして自ずとでてくる art を体現する以外の選択肢はない。

本企画の話題提供の先生方からは、何よりも、宗教が役に立つかどうかというよりも、人として、宗教家として、如何に真摯に現代社会に生きているかという art を拝見して、とても感銘を受けた。

科研費プロジェクト成果の初披露に参加して

具志堅伸隆(東亜大学)

昨年9月、札幌で開催された日本心理学会第77回大会のシンポジウム「宗教性／スピリチュアリティと精神的健康の関連」において、話題提供を行う機会に恵まれました。このシンポジウムは、2012年から行われている科学研究費補助金・研究プロジェクト「宗教性／スピリチュアリティと精神的健康の関連」の概要紹介と、初期段階の報告を行うことを目的とするものでした。これまで科研費プロジェクトは、様々な会合で議論を重ね、作業を積み上げてきました。その道のりは決して平坦なものではなく、様々な紆余曲折や困難な場面を乗り越えて現在に至っています。メンバーの一員として自分の能力の至らなさを痛感することもしばしばでした。しかし、日本心理学会のシンポジウムにおいて、その具体的な成果を披露できたことは、最終的な目標(=研究成果報告書の完成)に向けた重要な一里塚であり、意義深いことであったと思います。

シンポジウムは大会3日目(最終日)の最終セッションとして設定されました。開催地が北海道であったことから、最終日は早めに帰路につく人が多いと予想されたため、「どれだけの参加者が集まるだろうか?」と大変心配をしました。事前

に松島さんから「配付資料は20人分用意してください」と連絡がありましたが、正直なところ、「20名も集まるのだろうか?」「余りの配付資料が多く出るのではないだろうか?」という思いで準備をして臨みました。しかし大変幸いなことに、当日は21名の参加者があり、配付資料も「完配」となりました。スケジュール的には決して良いとは言えないセッションであったにもかかわらず、これだけの参加者があったことは驚きでした。宗教の心理学的研究への注目が高まりつつあることの現れであると思います。

シンポジウムでは松島さんの趣旨説明に続いて、浦田さんによる質的研究班に関する報告、徳野さんによる数量的研究班に関する全体報告があり、私は徳野さんの発表を受けて、「宗教性／スピリチュアリティと精神的健康の関連—量的調査からの検討—」と題して、2013年1月に行われた予備調査結果の一部を報告しました。宗教心理学研究会ホームページに当日の発表スライドがアップされていますが、以下、その主要なポイント・概要を整理いたします。

・私が個人で過去に行ってきた研究(具志堅・下

家, 2011)では, “スピリチュアルブーム”の中で多く語られている言説・事柄を一般人向けの書物の内容を分析することによって抽出し, 「スピリチュアリティの信念尺度」を作成した。

・今回の研究では, 「スピリチュアリティの信念尺度」の下位尺度のうち, 精神的健康との関係が強い「心象の現実化(項目例:「こうなったらいやだな」という不安感を強くいだと, その思いは現実化してしまいます。心で思ったことは, 実際の出来事を引き寄せる力があるのです)」、「人生の意味(項目例:人生で起こる出来事や, 人との出会いは, あなたが人間として必要なことを学び, 成長するために, 見えない縁によってやってきます。単なる偶然ではないのです)」、「因果応報(項目例:良いことも悪いことも, 何かしたことにはいつかどこかで, それに見合った結果が現れます。他人に与えた親切は, 思いがけないところで好運となって戻ってくるものなのです)」の3カテゴリー14項目を抽出し, 「スピリチュアル現象尺度」を構成した。

・調査は2013年1月に実施。調査対象者は大学生199名(男性115名, 女性84名)であった。

・質問紙では, 宗教性/スピリチュアリティに関する尺度として「スピリチュアル現象尺度」の他, 「宗教観尺度(金児, 1997)」、精神的健康に関する尺度として「主観的幸福感尺度(伊藤ら, 2003)」、「日本語版WHO-5健康状態指標」を用いた。

・宗教性/スピリチュアリティの指標と精神的健康の指標との相関を検討したところ, スピリチュアル現象尺度の3因子(「心象の現実化」、「人生の意味」、「因果応報」)は「主観的幸福感尺度」、「WHO-5健康状態指標」と有意な正の相関を示したのに対し, 宗教観尺度ではいずれの因子においても相関が認められなかった。

・ただし, 男女別に分析したところ, 男性では上記と同じ結果が見られたものの, 女性ではスピリチュアル現象尺度と健康度指標との相関が認められなかった。

・さらに, 「主観的幸福感尺度」および「WHO-5健康状態指標」の得点を目的変数, 「スピリチュ

アル現象尺度」および「宗教観尺度」の各因子得点を説明変数とする重回帰分析を実施したところ, 「スピリチュアル現象尺度」の「人生の意味」が有意な正の効果を示した。

・ただし, これも男女別に分析した場合, 男性では上記と同じ結果が見られたものの, 女性では有意な効果は認められなかった。

・さらに, 「スピリチュアル現象尺度」の各因子得点を目的変数, 「宗教観尺度」の各因子得点を説明変数とする重回帰分析を行ったところ, 「心象の現実化」、「人生の意味」、「因果応報」、いずれの因子においても, 「靈魂観念」が有意な正の効果を示した。

・総合すると, まず「靈魂観念」の高さが, スピリチュアル現象に対する信奉に繋がっている。そして, 男性の場合には, スピリチュアル現象の因子のうち, 「人生の意味」の信奉が精神的健康に繋がっていると言える。すなわち, 人生で直面する出来事が, 単なる偶然ではなく, 何らかの意味や必要性があつて生じていると考えることが, 精神的健康と結びついている。

以上の発表に対して, フロアからは, 「スピリチュアル現象尺度と健康度指標の相関は有意であるものの高い値ではない。健康度指標として用いた尺度が適切ではなかったのではないか?」との指摘がありました。これは私としても予想外の反応で, 満足のゆく回答ができなかったのですが, 困っている私を見かねて, 松島さんがすかさずフォローに入ってください。今回の調査で使用した主観的幸福感尺度(伊藤・相良・池田・川浦, 2003)がWHOの作成した「心の健康自己評価質問紙(Subjective Well-Being Inventory; SUBI)」を基に作成されたもので, 精神的健康を測る指標として適切な尺度なのだという点などを補足説明していただきました。共同研究を行っているチームとして発表することの強みを感じ, 大変有り難かったです。

聴衆の皆さんは, 途中で退出する人もなく, 最後まで熱心に耳を傾けてくださいました。大会最終日, 最後のプログラムへの参加ということで, 様子見ではなく, このシンポジウムのテーマに強

い関心を持って聴いて下さっていることが伝わってくる充実した2時間でした。ただ、シンポジウム終了後、帰りの飛行機の時間が迫っていましたため、早々に会場を後にしなければならず、松島

さん、浦田さん、徳野さん、フロアの皆さんとゆっくりお話しすることができなかったのが心残りではありました。この機会に、改めて感謝申し上げます。有り難うございました。

初めて日本心理学会に参加して

徳野崇行(駒澤大学:非会員)

この度、日本心理学会にて、科研費[基盤研究(B)]プロジェクト「宗教性／スピリチュアリティと精神的健康の関連——苦難への対処に関する実証的研究」の数量的研究班の研究経過を報告いたしました。普段、私は宗教学や仏教学の学会を主な活動の場としておりますので、心理学との「他流試合」を経験することができ、貴重な体験となりました。

本報告では、数量的研究班の活動報告として、まず2013年1月から2月にかけて実施した予備調査について述べ、宗教観尺度・宗教行動尺度・諦観尺度・スピリチュアリティ的信念尺度・死別後の主観的変化尺度・死観尺度・主観的幸福感尺度などの質問項目を用いて行ったこと、また質問項目に関するこれまでの検討内容について発表いたしました。

次いで、2013年11月から2014年3月にかけて実施を予定しているキリスト教・仏教・神道の信者や檀信徒、中高生や宗教系大学の大学生などを主な調査対象とする本調査の概要について報告いたしました。

シンポジウムの感想としては、15:30からの大会最終日の最終回であったのにもかかわらず、多くの方が参加して下さい、ディスカッションにおいても忌憚のない意見が寄せられ、本調査への期待を感じました。ディスカッションの時に寄せられた質問として、①「宗教系の中学校や高校を対象としているが、宗教系ではない中高と比較しても差はないのではないかと」という御意見がございました。私はこの質問に対して、自身が曹洞宗系の駒大苫小牧高校出身であり、坐禅の授業や昼食の前に五観の偈という唱句を唱えるという実践

が行われていることを報告し、一般と宗教系の中高生の宗教意識の差が本調査で明らかになるのではないかとお答えいたしました。

また②「スピリチュアル現象尺度と主観的幸福感尺度との相関は有意ではあるが、結果の数値が低いのではないかと」の質問もありました。この点については、今後検討すべき項目になるかと思えます。

初めて参加した日本心理学会でポスター発表などを拝見して感じたのは、手術後の心理的な変化を統計的に分析するような研究があり、カウンセリングなどの領域とは別に医療と直結したかたちで心理学が展開されていることでした。

また数量的調査のサンプル数を見てみると100前後のものが大半でした。それに対し、本プロジェクトの本調査の調査対象に一般人・宗教教団信者7730から8360人、宗教者224人から380人を予定していることは、本プロジェクトの試みが心理学というフィールドにおいて大規模で、画期的な試みであることをあらためて実感いたしました。

日本人の宗教的な行動や意識の数量的な研究の一つに真言宗・浄土真宗・曹洞宗、日蓮宗などの仏教教団が実施した檀信徒調査があげられます。これらの調査では、各宗派の寺院の檀信徒を主な対象とし、サンプル数が2000前後のものもあり、比較的大規模な調査となっています。これらの調査は各教団が今後の布教教化を検討する目的のもとに実施されているため、檀信徒の宗門への信仰のあり様や供養といった営みが質問項目を構成し、そのほとんどは単純集計や性別・年齢・都道府県といった属性項目によるクロ

ス集計を報告するものとなっています。こうした調査では、浄土真宗の門徒を対象としたものを除き、心理学的なアプローチによる分析などはあまり行われていないのが現状です。このような状況のなか、本プロジェクトでは一般の大学生や成人だけでなく、曹洞宗の檀信徒や神道系教団の信者を対象としつつ、より踏み込んだ心理学的な分析によって日本人の宗教意識や行動の新たな知見が示されると思います。

今回参加させていただき、ポスター発表をはじめ

めて体験することができました。その研究内容を見ると、臨床的な研究からテレビゲームの対人関係に与える影響など、さまざまな研究テーマがあることを感じました。その中で「日本人の宗教意識」を正面から問う、という試みは心理学だけでなく、日本の宗教を巡る様々な学問分野に対して重要な発信となると思いました。以上、誠に簡単ではございますが、シンポジウムに参加した私の感想となります。

宗教心理学に関する二つのシンポジウムに参加して

小泉晋一(共栄大学)

2013年9月に、札幌コンベンションセンターで開催された日本心理学会第77回大会に参加しました。多数の公募シンポジウムが開かれるなかで、宗教心理学に関するシンポジウムが二つありました。一つは宗教心理学研究会企画のシンポジウム「宗教心理学的研究の展開ー現代社会における『宗教の役割』を考えるー」で、もう一つは科研費研究プロジェクト企画のシンポジウム「宗教性／スピリチュアリティと精神的健康の関連」でした。両方のシンポジウムに参加しましたが、前者は途中からの参加で、後者は途中までの参加です。したがって、どちらも十分な参加とはいえないのですが、この二つのシンポジウムの感想を簡単に書かせていただきます。

シンポジウム「宗教心理学的研究の展開」は、曹洞宗総合研究センターの平子泰弘先生と南山大学の西脇良先生、出雲大社和貴講社の酒井克也先生が話題提供をされました。仏教、キリスト教、神道の立場からのお話を一度に聞ける機会はなかなかないので、今回は貴重な時間をいただけたと思います。ただ途中参加のため、残念ながら平子先生のお話には間に合いませんでしたので、西脇先生と酒井先生とのご発表のなかで、特に印象に残ったことだけを述べさせていただきます。

西脇先生はスライドを提示しながらのご発表

で、カトリックの小学校の写真が印象的でした。カトリックの小学校を設立するには、聖堂やステンドグラスなどの宗教施設の設備に心を砕き、宗教設備を置くだけで、そのシンボルの持つ力が子どもたちに対するノンバーバルコミュニケーションとして作用するというお話には納得しました。宗教施設のもつ一種の「場の力」というものを私は常々感じておりますが、それはキリスト教に限らず仏教や神道にも共通したことだと思います。清浄な場を保つためには、普段の清掃はもちろんのこと、聖職者の信仰心や霊性を高めることが不可欠だと思います。そうすることによって宗教設備そのものがもつシンボルとしての力をもち、それが多大な教育的効果にもつながるのだと思います。

神道の立場からお話をいただいた酒井先生からは、日本人の生活基盤には今でも神道思想が根強く残っていることをお教えいただきました。「水に流す」という言葉は、神道の禊の思想と関係しており、それはケガレを嫌って、清明正直を尊ぶ神道の根幹思想でもあります。山や川や海などのあらゆる自然物に神聖なものを見出し、それらを畏れ敬い、神々から恩恵をいただき感謝するという日本人独自の生活観は、神道によるものです。酒井先生のお話からは、日本人の生活の根底には神道思想が深く流れていることを再

認識しました。

科研費研究プロジェクトの企画シンポジウム「宗教性／スピリチュアリティと精神的健康の関連」では、帰りの飛行機の都合で、3人の話題提供者のうち最初のお二人の発表を聞きました。欧米諸国では宗教と精神的健康との関連を検証した研究は少なくないと思いますが、日本では十分に行われていません。お二人のお話を聞いて、宗教性／スピリチュアリティと精神的健康との関連を検証するための大規模な研究が動き出し、質的・量的を含めて多量のデータが蓄積されつつあることがわかりました。特に宗教実践者(指導者および信徒)に対するインタビューなどは個人研究では限界があることと思われるので、こ

のプロジェクトの成果が期待されます。自殺率やうつ病患者の増加などにみられるように、現在の日本は精神的健康という側面では深刻な事態を抱えています。東日本大震災以降、宗教の果たす役割が見直されています。日本人の多くは特定の宗教をもっていません(宗教を問われると多くの人は「無宗教」と答えますが)、それでも宗教が日本人の精神的健康に及ぼす影響は決して小さくないと思います。これからの日本人の精神的健康を高めるためにも、宗教性と精神的健康とに関する実証的・基礎的研究を積み上げることは重要で有意義なことだと思います。このプロジェクトの今後の成果を期待します。

コラム 関西地区勉強会だより それぞれのコスモロジーとの調和を目指して

関西地区勉強会世話人 中尾将大(大阪大谷大学)

梅の花もほころび、春の気配を感じ始める今日この頃ですが、研究会の諸先生方に置かれましては如何お過ごしでしょうか。自然の姿は実に美しいものです。我が家の近所でも紅梅が咲いておりますが、色や形が実に美しいのです。殊に天気の良い日は日光を浴び、美しさに磨きがかかります。自然はあらゆるものと調和しているからこそ、美しく、そして、生命力を発揮しているのだと思います。我々人間も梅の花に劣らずに、あらゆるものとの調和の中で「生命の煌き」を謳歌したいのだと思います。

2013年3月から「関西地区研究例会」から「関西地区勉強会」と規模を縮小し、私が世話人をさせていただくことになりました。先生方のご理解とご協力のおかげをもちまして、これまで都合4回にわたって継続して勉強会を開催することができました。この場をお借りして感謝申し上げます。この状況まで「回復」するには決して平坦な道ではありませんでした。

2012年3月、主に関西地区の研究会員が中心となって研究発表会の開催を目論んだ「関西

地区研究例会」が立ち上がりました。私も第1回目の会合に参加させていただき、「いよいよ関西でも宗教心理学についての情報交換、勉強の場所ができたな」と期待に胸を躍らせておりました。そして、ご縁をいただき、第1回例会の発表をさせていただきました。その時は10名前後の参加者を迎え、活発な議論が行われました。しかし、それ以降は継続しての開催はされず、迎えた第2回目の例会における参加者は、発表者2名とお世話役を含んでのわずか5名へと減少してしまいました。

つまり、関西地区ではわずか2年足らずのあいだに、研究例会の低落と勉強会としての再起という波乱の幕開けを迎えたこととなります。私がお世話役を受け継いだ段階では、言わばマイナススペースからの再起を目指さなければならないという非常に厳しい状況にありました。しかし、研究会事務局の松島公望先生をはじめ、関西地区有志の先生方の温かく、かつ強力な後押しをいただき、なんとか再テイクオフを果たし、現在低空飛行ながらも勉強会という名の飛行機を飛ばせ

続けることができました。本当に感謝の言葉もございません。

このような来し方を振り返り、私なりになぜ関西地区での活動が下火になってしまったのか、その原因を探ってみました。第一に挙げられるのは「タイミングを外した」ということでしょう。「時を外さず」、という言葉がございしますが、要するにしかるべきタイミングで行動を起こさないと取り返しがつかなくなるということです。ちょうど野球のバッティングと同じで、しかるべきタイミングでバットを振らないと芯でボールを捉えることができず、結果として遠くにボールを飛ばすことができないことと同じことです。

第1回目の会合が盛会となり、第1回例会も盛り上がりを見せて、その勢いのままに第2回例会が開催され、以降もこのようなスタートダッシュを利用したうえで、継続して例会を開催できていたとしたら、ひょっとしたら現在の勉強会以上の盛り上がりを見せていたのかもしれないと思います。しかし、その時のあらゆる事情からそのような継続的開催は難しかったようです。スタートダッシュから時間が経つと得てして、活動の勢いは冷めてしまうものです。その当時を振り返りますと、だんだんと会員の先生方の関西地区研究例会への関心が低くなったばかりではなく、関西地区研究例会の存在すら記憶から忘れ去られていたのかもしれないと思います。その当時、私は「このままで関西地区研究例会は本当に大丈夫だろうか。立ち消えになりはしないだろうか」と心配していたことを今でも覚えております。

第二に、私自身が第二回例会やその後の勉強会に毎回参加させていただいて感じていたことなのですが、「異分野(異文化?)に対する理解と共感の不足」ということではないかと思いましたが、いまだめぐみ関西学院大学名誉教授で心理学者の今田 恵(1894 ~ 1970)はその著書「宗教心理学」において次のように述べています。

「宗教心理学は宗教の説明を父とし、人間性の理解を母として生まれた」

今や宗教心理学は上記に示された宗教と人

間性心理学という2つの分野では収まりきらないほど多くの分野との関連が見られるようになりました。まさに異文化のつぼと言えるでしょう。実際にメンバーも関西地区勉強会においてだけでなく、母体の宗教心理学研究会においても多くの分野の専門家の先生方が揃っておいでです。ということは一口に宗教心理学と申ししても、その視点や探求方法は多く存在すると言えるでしょう。このような状況において(極端な話ですが)もし、誰かがある一定の分野(コスモロジー)だけが正統であって、その他の分野を異端視し、認められないなどと言いつつしたとしたらどうでしょうか。途端に研究分野として宗教心理学は立ち行かなくなってしまうと思います。もちろん、上記のような極端な意見はありませんでしたが、少なくとも自分とは全く畑違いの分野の発表内容であるにもかかわらず、自分の畑の論理に立って畑違いの分野に対する批判や意見が述べられるという場面はあったのではないかと考えています。

もちろん客観的に批判すべきところは批判をせねばなりません。余りに自分の専門分野での価値観ややり方を優先させるあまり、そのお立場でのご発言が、時折お聞きしてその発表や場にそぐわない的外れなものになっているなど感じた場面もございました。この点は今後の勉強会の活動において気をつけなければならない点だと思えます。宗教心理学は実に多くの領域と関連しているという性格を持つので、今後、多文化主義(マルチカルチャリズム)に立った上で活動をしてゆかないと立ち行かないのではないかと強く感じたことでした。そのためにはまず、異文化に理解と共感を示すことが大切であると思えます。そして、その次のステップとして積極的に異文化交流をしてゆく必要があると思うのです。

昨今、日本文化が海外で評価され、受け入れられるようになりました。「クールジャパン」と呼ばれ、今や世界中に日本の文化が広がってきております。さらに、外国人旅行者が東京だけでなく、西日本や地方都市にも訪れるようになりました。和食がユネスコ世界無形文化遺産に登録されたことも記憶に新しいことでしょう。

その中で、日本を訪れる外国人に一番気に入

った日本食は何だったか新聞社がインタビューをしたそうです。少し前なら「寿司」、「うなぎ」、「天ぷら」でしたが、最近は特に外国人女性の好きな日本食 No1 は「カレーうどん」だったそうです。我々日本人にとってはカレーうどんなど、何の変哲もないものでしょう。しかし、よくよくカレーうどんについて観察してみてください。うどんにかかっているのはカレーですが、これは元々インドの食べ物です。出汁とうどんは日本の食材です。そうしますと、一杯のカレーうどんはインド料理と日本料理のコラボレーションの賜物と言えるでしょう。これが「カレーはカレー、うどんはうどんだ。そんなものを一緒にされては困る。カレーうどんなんてあんなものはゲテモノだ」と捉えたならば、カレーうどんというマルチカルチャーは存在しなかったらうし、あの独特の風味と味を手に入れることもできなかったことでしょう。それが今ではどうでしょう。カレーうどんは今や「欧米人も好む味」になったのです。つまり、文化の異なる者同士が一緒に「美味しい」と認めるものに成長しているといえるでしょう。

この事実を宗教心理学に置き換えてみましょう。自分の専門やトレーニングを受けてきた分野

(コスモロジー)だけで物を言うのではなく、他の専門分野や他のトレーニングを受けてこられた方の分野への理解を示す、いわば異文化に対する受容と共感が大切ではないでしょうか。そこからお互いのコスモロジーの境界が融解し、新たなコスモロジーが自ずと顔を出してくるに違いありません。それこそが我が家の近所でひっそりと咲いている梅の花が教えてくれた「あらゆるもの(分野)との調和の姿」ではないでしょうか。諸先生方が身を置かれ、また、ご自身の中で形成されているあらゆるコスモロジーがハーモニーを奏で、美味なる宗教心理学という名のカレーうどんをこれから一緒に作ってゆくことができればと願うものです。

また、関西といえば、うどん文化です。美味しく、安価で、庶民的で親しみやすい食べ物です。私ども関西地区勉強会もこのうどんのように関西の特色を出しつつ、美味しくて誰もが親しみやすい会にしたいと考えております。今後とも関西地区勉強会に温かいご支援とご指導を賜ることができれば幸いです。どうぞよろしくお願い申し上げます。

事務局からのお知らせ

宗教心理学研究会ニューズレター第 20 号が発行されました。今回の内容は、日本心理学会第77回大会公募シンポジウムの報告および発表者・参加者からの感想となっております。今号では、通常の研究会企画の研究発表会報告だけでなく、研究会会員有志で行っている科研費研究プロジェクトにて企画したシンポジウムについても記事を掲載いたしました。さらに、関西地区勉強会設立趣旨にて提案した「コラム 関西地区勉強会だより」を掲載いたしました。

今号は、会員のみならず非会員の方々にもご寄稿いただき、非常に充実した内容となっております。これからも研究会に対する会員の皆さまからのご意見、ご感想をお待ちしております。(K.M)

[宗教心理学研究会の今後の予定]

2014 年 5 月

日本心理学会第 78 回大会公募シンポジウム申し込み

2014 年 7 月

関西地区勉強会 実践企画[京都 稲荷山神社]開催

2014 年 9 月 10 日(水)～ 12 日(金)

日本心理学会第 78 回大会公募シンポジウム(第 12 回研究発表会)開催

[開催校:同志社大学心理学部 会場:同志社大学今出川キャンパス]

発行:宗教心理学研究会
編集:宗教心理学研究会事務局

研究会事務局

担当:松島公望[psychology-religion@office.so-net.ne.jp]

研究会ホームページ管理・運営

担当:横井桃子[psych.religion.web@gmail.com]

研究会ホームページ

http://www.geocities.jp/psychology_of_religion_japan/